

◇江戸遺跡研究会第80回例会は、2001年5月16日（水）18:30より江戸東京博物館◇
◇学習室にて行われ、大成可乃氏より「大村藩下屋敷跡の調査－港区東京大学白金◇
◇構内遺跡－」の発表をいただきました。◇

大村藩下屋敷跡の調査　－港区東京大学白金構内遺跡－

大成　可乃

東京大学埋蔵文化財調査室

1. 遺跡の位置とその環境（図1）

本遺跡は港区白金台にある東京大学白金構内の医科学研究所1号館建物の北側に位置する。地形的には東から北方に向かって延びる舌状の台地上に立地し、調査地の東側には南北方向に延びる谷筋がはいり、台地から谷へと地形が変わる場所でもある。

歴史的には江戸時代、大村藩下屋敷（以下、白金邸と称す）に該当することが文献史料などから明らかとなった。また明治時代、日本初の伝染病研究所が設立された場所でもある。

なお本遺跡に隣接してすでに報告がなされている白金館址遺跡がある。

2. 調査経緯と概要

発掘調査は医科学研究所付属病院診療棟・総合研究所の建設に伴って、平成12年7月5日～7日に試掘調査を実施したところ調査区西側で表土から-60cmほどで19世紀中頃の遺物包含層が確認されたほか、ローム面上では18世紀後半の遺物を含む遺構が2基確認された。その調査結果に基づき港区教育委員会と東京大学医科学研究所と東京大学埋蔵文化財調査室で協議した後、2000年10月27日～2001年3月9日の約4ヶ月間にわたって4280㎡の本調査を実施した。その結果、調査区西半分は攪乱が著しかったこともあってか遺構、遺物ともに散漫であったが、東側半分では攪乱は受けていたものの比較的良好な形で江戸時代の建物址、溝、ごみ穴などが確認された。また試掘調査時から予想されていた江戸時代以前の調査も行ったところ、覆土の状態などから縄文時代の遺構と考えられる陥穴や性格不明の土坑などが確認されたほか、旧石器時代のフレイクが2点、ポイントが1点出土した。

3. 大村落の概要（『藩史大事典』から）

- ・肥前国（現長崎県）東彼杵郡・西彼杵郡に成立、居城は大村に所在、大村城または九島城
- ・江戸時代を通じて大村氏が12代にわたり領有、石高2万7973石。
- ・参勤交代は2年ごとで、子・寅・辰・午・申・戌の11月に参勤、3月に帰国するので在府は僅か5ヶ月。
- ・上屋敷は外桜田備前町、永田町、下屋敷は白金、湯島天神下（2回の相対替を経て不所持）、麴町元山王下、市谷薬王寺前（2回の相対替を経て不所持）

4. 白金邸について

- ・寛文元（1661）年3月21日 白金村に5600坪拝領
- ・寛文8（1668）年2月1日 上屋敷類焼、藩主純長5月8日参府のうえ白金邸に居住
- ・元禄2（1689）年4月中旬 純真退身のため白金邸に移住、秋中大村へ下向
- ・明和9（1772）年2月29日 目黒行人坂火事により類焼、同年に家作ならびに七社再興
- ・寛政6（1794）年11月27日 上屋敷の屋敷替えに伴い、家作出来まで住居
- ・弘化2（1845）年1月24日 青山辺り出火の飛び火により2間梁8間の表長屋1棟類焼
- ・嘉永3（1850）年2月5日 上屋敷住居向き・表長屋とも残らず類焼につき家族住居
- ・安政元（1854）年10月12日 藤堂乗之丞屋敷（西隣）より出火、合い壁にて住居向き残らず焼失
- ・安政2（1855）年10月2日 安政大地震により所々破損、但し、死傷者なし

5. 調査結果（図2）

☆西側

表土を30～50cmほど掘削したところでローム面が確認され、江戸時代の生活面および包含層は確認されなかった。遺構の大半はピットが占めるが、その大部分は覆土などから近代と考えられるものである。しかしその中でも出土遺物から廃棄年代が明ら

かな遺構として18世紀末と推定される井戸、地下室各1基、18世紀初頭と推定される土坑1基、そして17世紀後半と推定される土坑1基なども検出されたほか、覆土や遺構の主軸の方位などから推測して18世紀後半から19世紀と推測される溝や柵列なども検出された。

☆東側

段切り

調査区中央から東側では先述の通り南北に延びる谷筋が確認されたが、その谷の立ち上がり部分を段切りし3段の平場を作り出していることが明らかとなった。最も立ち上がりに近い最上段の平場は東西幅10mあり、その上に掘立柱建物址（掘立柱建物址の詳細は後述）を構築し生活していた状況が確認された。中段の平場は東西幅約2.5mあるが、他の平場とやや様子が異なり、西から東へ緩やかに傾斜し、検出された遺構も植栽痕がその大半をしめる。最下段の平場（調査区Cライン付近）は東西幅約5m以上あり、段切りと同一方位の主軸をもつ溝が平行して2本検出された。この溝はともに東西幅60cm強、深さが30cm強で形状がV字状を呈すが、溝1の方が溝2より早く埋没した様子が断面調査から確認されている。なお最下段の平場にはこの2本の溝以外にはほとんど遺構は確認されなかった。

掘立柱建物址

段切り最上段で東西2間×南北21間以上を確認した。柱の直径は50～60cm、深さはグリット3ラインから北側では70～80cm、南側では30～40cmで、形状はいずれもやや楕円形を呈す。礎石、根石などの痕跡が認められないことから掘立柱建物であったことがわかる。なお、東側の柱筋と西側の柱筋の間隔は2間幅あるが、その間の柱が確認された場所は2カ所しかない。また前述のように柱穴の深さが3ラインより北と南では大きく異なることなどから、柱筋を揃えて複数の建物が建っていた可能性もあり、この掘立柱建物址に附帯すると考えられる雨落ちの溝や、便所、土留めと考えられる柱列などの施設との位置関係なども考慮してさらに検討する必要がある。

掘立柱建物址の構築あるいは廃絶時期については、柱穴などから18世紀後半と考えられる遺物が数点しか出土しておらず、単独では時期の特定はできない。よって周囲の状況なども合わせて類推するしかないが、その材料の一つに段切りの上に構築されていた版築が挙げられる。この版築は谷のはいる屋敷地の東側の一部分をかさ上げして、はいらない西側と同じ高さの平場を確保しようとしたものようであるが、この版築層中からは「寛政年製」銘のある磁器皿底部片をはじめ、18世末頃のものと考え

られる陶磁器類が多く出土している。従ってこの掘立柱建物址は18世紀後半のある段階に構築され、版築によって埋め立てられる18世紀末頃まで存続していた可能性が高いと考えられる。

SU360

段切り最上段の掘立柱建物址の南側で確認されたアーチ状の天井を有する地下室である。入口は東西約1.7m×南北約1.5m×深さ約1.7m、床面は東西約2m×南北約1.9mあり、床面中央よりやや東よりにスロープが一段設けられていた。断面の観察から、天井が崩落した後一気に埋まった様子が確認されたが、床面直上で一本の長さが約20cm、幅約2cm、厚さ約1cm、断面形状が蒲鉾形を呈する棒状の鉛100本余りが束ねられた様な状態で出土した。棒状の鉛がこのようにまとまって出土した例は希有であり、藩邸内でのその用途を検討していく必要がある。また、地下室の床面直上で遺物が出土することもさほど多い事例でないことから、地下室の用途を考える上でも非常に興味深い資料である。なお、この地下室は共伴する陶磁器類の様相から18世紀中頃の遺構と考えられる。

SX207

東西約18m×南北約23m×深さ約1.8mのやや歪な長方形を呈する。覆土には焼土が極めて多く含まれ、その焼土中からは多くの被熱した瓦や陶磁器が出土したほか、貝殻や犬の下顎骨などの自然遺物なども出土した。出土陶磁器の様相から19世紀中頃に廃棄された遺構であると思われる。瓦は棧瓦が大半を占め、様々な刻印が押されているものが数多く確認されている。また大村藩の家紋の入った軒丸瓦も1点ではあるが出土した。

遺構の覆土、器壁や坑底の観察などから本遺構は採土坑として掘削されたものが、その後ごみ穴に転用され、最終的には火災後の後始末の際に一気に埋められたものと考えられる。なお、この火災がいつのものなのかを文献史料と照合したところ、現時点では安政元（1854）年の火災に比定される可能性が高い。

6. 調査成果と今後の課題

台地から谷へと地形が大きく変化するような場所を藩邸として拝領した際に、どのように生活空間を求め利用したのかを示す資料が得られたことは本地点の調査成果の一つである。今後、文献史料なども照合して土地利用の改変がいつ、どのような目的で行われたのか検討することが課題となる。また今回掘立柱建物址が検出されたが、

本郷構内で今までに調査されている掘立柱建物址にみられた井戸や地下室のような附帯施設が確認されなかったほか、間取りも異なるものである。このような附帯施設の有無や間取りの様相差は掘立柱建物址の性格や居住者を考える上で重要な事柄であり、今後ほかの掘立柱建物址の調査事例や大村藩に関わる文献史料なども合わせて本地点で検出された掘立柱建物址の性格や居住者などを考える必要がある。

遺物としては、SX207から出土した大量の陶磁器類が今まで余り出土例の多くない19世紀中頃の良好な一括資料であり、この時代の陶磁器類の様相を把握する上で基準資料となるものである。また同遺構から出土した「柴安」などの刻印が押された瓦についても、この時代の瓦の生産や流通などを知る上で重要な資料となるであろう。

なお、本地点の文献史料の収集および判読は当調査室員の渋谷葉子氏に行っていた。末筆ながら御礼申し上げます。

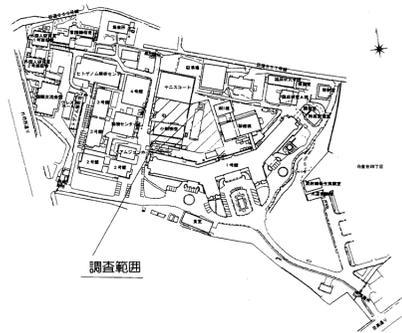
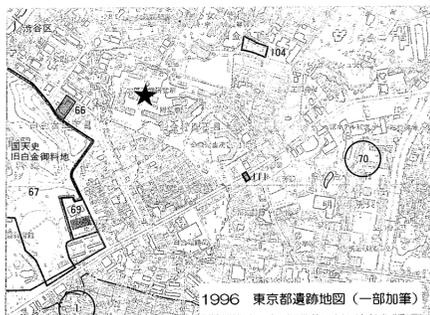


図1 調査位置図



図2 調査区全体図

夏の特別例会のご案内

今年の江戸遺跡研究会特別例会は、下記の要領での開催を予定しております。
日時が変更になっておりますので、ご注意ください。

- ・日 時：8月25日(土) 13:00～
- ・内 容：市ヶ谷北遺跡
山梨県鯉沢河岸跡
飯能市原窯跡
- ・場 所：江戸東京博物館 学習室

📖 📖 📖 最近の文献 📖 📖 📖

単行本・図録

- 江戸遺跡研究会編2001.4『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 浅川滋男・箱崎和久編『埋もれた中近世の住まい』同成社
- 小野正敏編2001『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 谷口榮編『江戸・東京のやきもの-かつしかの今戸焼-』葛飾区郷土と天文の博物館
- 坂詰秀一2000.10『歴史と宗教の考古学』吉川弘文館

論文・資料紹介など

- 福島県考古学会中近世部会2001.3「東北南部における中近世集落の諸問題-堀立柱建物跡を中心として-」『福島考古』42
- 鈴木裕子2001.5「ベトナム産印判手鉄絵菊花文深皿について-江戸、長崎、インドネシア、バンテンの出土資料を中心に-」『東京考古』19
- 朽木 量2001.5「近世墓標の統計学的分析による墓地空間の利用順序の復元-墓地・墓標の現象学的な理解に向けて-」『民族考古』5
- 桜井準也2001.5「近世の鍋被り葬と村境-村落空間論との関わりから-」『民族考古』5
- 森本伊知郎2001.3「肥前広東碗の器形・文様の変化に関する考察-広瀬向2号窯出土資料を中心に-」『東邦考古』25
- 我妻 仁2001.5「仙台城本丸跡石垣における階段状石列の構造と役割(予察)」『宮城考古学』3

- 大橋康二2001.5「鍋島焼の編年についての考え方」『青山考古』18
- 村上伸之2001.5「肥前の連房式登り窯と章州窯の横室階段窯」『青山考古』18
- 堀内秀樹2001.5「中国貿易陶磁器研究の到達点—明・清代—」『季刊考古学』75
- 鈴木孝幸2001.3「中～近世の地鎮について（上）」『埼玉考古』36

報告書

- 千代田区教育委員会2001.3『江戸城の考古学—江戸城跡・江戸城外堀跡の発掘報告』
- 千代田区教育委員会2001.3『岩本町二丁目遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター2001.3『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅶ』
- 東京都埋蔵文化財センター2001.3『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅷ』

第81回例会ご案内

日 時：2000年7月19日（水）18:30～

発 表：厚 秀雄 氏

「千代田区飯田町遺跡(高松藩上屋敷跡)の調査」

会 場：江戸東京博物館 学習室

交 通：J R 総武線両国駅西口改札
徒歩3分

問合せ：江戸東京博物館

03-3626-9916(小林・松崎)

東京大学埋蔵文化財調査室

03-5452-5103(寺島・堀内・成瀬)

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>



【編集後記】第80号をお届けします。例年7月に行っていた特別例会は、8月25日（土）に行います。皆様の参加をお待ちしております。